

それでも人間環境評価実験施設 (ELMES—Evaluation Laboratory of Man—Environment Systems) と称する装置がある。これはコンピュータを利用した大きな実験室で、このとき対象となるのは人間集団である。そこではプロジェクター、オーディオ等の装置で環境に対するさまざまな施策が SAPIENS (SAP Information for Environmental Systems) とよばれる地区レベルから国際レベルまでの環境情報により構築されるデータベースにもとづきスクリーンやスピーカーから再現されて被実験集団に提供される。被実験集団はその環境の状況の評価して、それを押しボタンで回答する。回答結果は大型コンピュータにつながれ直ちにフィードバックされて、意見分布が表示される。このようなやり方で集団のもつ評価値を集約する実験や、集団構成員に対する行動科学的分析が実施されている。

その他、環境情報部では環境情報の貯蔵や処理が行なわれているが、その中では特にコンピュータを利用した画像解析、リモートセンシングの研究、IPSEN (Image

Processing Systems for Environmental Analysis and Evaluation) と称するコンピュータのシステムなどが開発されている。

最後のものは新聞等でしばしば報道されたが、たとえば街並の中から電信柱を除去すると、どのような景観になるかなどということ画像処理によって示し、開発のプランを評価するということである。これは前記の ELMES と結合されて、環境計画に役立っている。

国立公害研究所は常磐線の荒川沖から車で10分程度。現在すべての科学で環境問題に関係のないものを探すのがむずかしいくらいであるので、誰がきても興味のある視察をすることができる。特に前記のように、オペレーションズ・リサーチに関係のある研究にも力を入れているので会員の皆様方が機会をとらえて見学にこられ総合解析部の人たちとも討論をされることを希望する。

ELMES については NHK ブックス「意思決定の方法」にもっと詳しい紹介がある。

(近藤次郎・西岡秀三)

## 東海大学 札幌校舎 通信工学科 (浅利) 研究室

当研究室は、昭和44年、東海大学札幌校舎通信工学科開設にともない設置された。最近まで筆者のワンマン研究室であったので頭書の題名とした。札幌校舎通信工学科は教養課程1・2年生(定員各50名)を收容する。学生は教養科目および専門科目(必修9, 選択1)を学んだ後、神奈川県平塚市の湘南校舎に移行して3・4学年の課程を履修する。筆者は1・2学年の回路理論、計算機理論、計測や実験など専門5科目を担当している。

当校舎ではORを講義する科目はないが、その実践の場が日常の教育活動の中にある。何分にも、OR歴はかつての電電公社勤務時代から25年を関するのである。

ORに関する講義は小樽商科大学と電電公社札幌電気通信学園でもっている。いずれも昭和46年来変遷をしつつロングランを続ける長いご縁である。毎年受講人員は前者で約400名、後者では30名である。どちらも講義にフィットさせた教材を自作して用いている。

これらの教育活動でもし成功していることがあるとすれば、それはかつて筆者が電電の学園訓練でビリの成績を修めた経験に負うところがあるといえよう。

ORの、あるいはORを用いた研究は研究室開設以来多方面にわたりにたえず行なっている。例をあげると、

- 北海道における気象情報利用市場調査(札幌管区気象台から受託)
- 設備保全における再帰過程
- 電気系専門科目の教育方法
- 北海道物流拠点設置問題(運輸省道物流対策委)
- 北海道稲作冷害対策(北海道科研補助)
- 気象雑音による気象予測方法
- 北海道酪農におけるローカルネットワーク(北海道科研補助)

などの課題や、“生物モデル”といった新手法が当研究室から出、あるいは舞台として遂行された。終結したもの今ようやく評価されだしたもの、現在とりくみ中のものなどさまざまである。他に「降水中のマイクロ波伝搬」や「パルス波受信装置」「光利用」など固有領域の研究があり、加えて学外の役職の遂行もあって結構忙しい。

悩みは、学内にアシスタントを兼ねた後継者がいないことである。それでも、今後展開し、また誰かに伝えた課題やアイデアはいろいろとあり、当研究室の続くかぎり、またそのあと筆者がフリーになっても活動のやむことはないであろう。

(浅利 英吉)